

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】小宮あすか

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院教育学研究科

【研究題目】謝罪スタイルの社会的基盤: 適応論アプローチを用いた検討

【研究の目的】

これまでの研究で、アメリカ人は補償(損失の補填)が関係維持につながるのに対し、日本人は謝罪が関係維持につながることを示されてきた。本研究は、この謝罪・補償の効果の日米差を生み出す要因として関係流動性という概念に着目し、その影響を適応論的観点から実証的に検討することを目的とした。具体的には、以下のようなメカニズムを想定している。新たな関係性の構築が多いアメリカは、世界の中でも関係流動性が高い社会であると言われている。このような社会では短期的な関係性が多いため、多少損をしてでも即時的な補償を志向した方が適応的であり、補償なしの謝罪では満足しないだろう。一方で、特定の集団内で閉じた関係性を構築しやすい日本は関係流動性が低い社会であると言われており、このような社会では長期的な関係が期待されやすいため、その場では寛容に振る舞い“借り”を作っておくことによって、継続した関係の中で自らが望む時に必要な援助を引き出す方がより適応的である。本研究では、このようなメカニズムが成り立つかどうかを実証的に検討した。

【研究の内容・方法】

本研究では、2つの研究(シミュレーション研究・実験研究)を行った。

まずコンピュータを用いて進化シミュレーションを行い、ある謝罪行動の適応度が本当に流動性によって異なるかどうか、理論的な背景を検証した。概要は以下の通りである。まずコンピュータ上に複数名のエージェントからなる仮想社会を作成し、エージェント同士がペアを作って(1)取引(囚人のジレンマ)を行い、(2)取引相手に搾取された場合には、相手から謝罪/補償を受けることによってペアを続ける(それがなければペアを解散する)状況を設定した。エージェント同士は取引を何回か繰り返した後、ペアを変えてまた同様の取引を繰り返したが、この際、ペアの組み替え頻度が高い条件(高流動性条件)と低い条件(低流動性条件)を作成した。シミュレーションの結果、謝罪で許す寛容な戦略は流動性の低い条件のみで安定的な利得を確保したが、その利得は補償戦略よりも高いものであった。一方、補償戦略は比較的流動性の高い条件でも安定的な利得を確保したが、その利得は謝罪戦略よりも低い利得であった。

この理論的な背景をもとに、実験室で流動性の高低を操作した仮想の社会状況を作成し、実験的検討を行った。本実験では、1セッションにつき10-20人の実験参加者が参加し、実験参加者は2人1組になって20回の取引を行った。この際、低流動性条件では同じ相手と長く取引を続ける一方で、高流動性条件では相手を変えながら取引を繰り返した。取引で相手に損失を与えた場合には、加害者は「謝罪」「補償」「何もしない」から行動を選択でき、被害者側はその謝罪行動を受けて、どの程度その相手と取引を続けたいと思うかを評定した。この結果、謝罪は、関係流動性の低い条件で、より関係継続の意図を引き出す一方で、補償は関係流動性の高い条件でより関係継続の意図を引き出していた。

【結論・考察】

本研究の結果から、流動性の高い社会では補償がより適応的・効果的に関係修復を促す一方で、流動性の低い社会では謝罪がより適応的・効果的に関係修復を促す可能性が示唆された。このことは、関係流動性という社会生

態学的要因が謝罪・補償の効果の日米差を生み出す要因のひとつである可能性を支持するものである。

本研究は適応論アプローチを用いて謝罪の効果の文化差を説明しようと試みた最初の研究であるが、問題点も存在する。例えば、本研究はシミュレーションおよび実験室実験にて検討を行ったが、より日常生活に近い方法での検討も必要であろう。具体的には、引っ越し回数が多く短期的な付き合いが多い人は少ない人よりも補償をより評価する一方で、一カ所に留まり長期的な関係が多い人は少ない人よりも謝罪をより評価するのか、といった検討が考えられる。このような検討を行うことにより、今後、効果的な関係修復をどのように行えばいいのか、モデルに基づいた精緻な予測・提案が可能になっていくと考えられる。